

『勅撰真本大同類聚方』について

後藤 志朗

一、はじめに

『大同類聚方』は、桓武天皇の遺命⁽¹⁾により、わが国で最初にまとめられた医薬書である。

平城天皇の大同三年(八〇八)に完成し、上奏されている。

しかし、寛政十一年(一七九九)に『日本後紀』⁽²⁾の残巻が刊行されて後、後紀の文中の記述と『大同類聚方』の編者名・官職名が異なっていることから偽書の疑がかけられた。

その雄が、佐藤方定の『奇魂』⁽³⁾である。

その内容は、富士川⁽⁴⁾・服部⁽⁵⁾・和田⁽⁶⁾・物集ら⁽⁷⁾に引用され、その後の偽書説の大きな流れを作っている。

ところが、佐藤方定が真本と認めて刊行した『大同類聚方』が存在する。それが『勅撰真本大同類聚方』である。

従ってこの本の検討なしには、『大同類聚方』が偽書であると断定するのは問題が残る。よって筆者は以下その点を検討し、真偽を明確にしたい。

二、佐藤方定

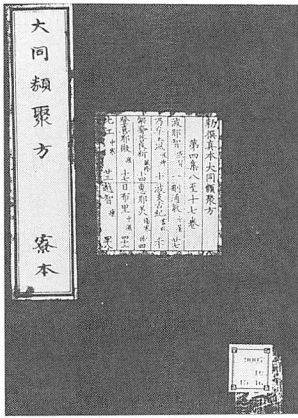
方定は、陸奥の国信夫郡の人で、祖父の代より医を業とし、江戸に出て、始め小川忠実を医の師とした。

文政八年（一八二五）に本居春庭の門に入り、天保二年（一八三一）に『奇魂』⁽⁸⁾を刊行している。この本の中で丹波頼理が、文政七年に著わした端文に「……、みそぢにもみたすよはひなるに、……」⁽⁹⁾とある所からして、方定が春庭に入門したのは三十歳頃と思われる。

方定は、『奇魂』を著わすまでに目にした『大同類聚方』の流布本・印本に対して八つの疑問点をあげて、偽書と断定している。

その疑問点は、「大同類聚方と名づけたる書は、天明の比、大阪と江戸にて板に彫しは丹波良康と云人の鈔きしたるもの由なれど、何も纒に十三方ばかりある小本にて、いと鄙くて物の数にもいるべからず。頃日出来る本は三つあり、一はかの板に彫し本也。是は従五位下典薬頭阿部朝臣真貞・侍医従六位上出雲宿禰広貞等奉勅同撰と云て一卷より百卷までありて、初に用薬を記たり。一つはこれも百卷有て、初より中までは彼小本の如き文体にて、中より末は右の板本の体にて、終に用薬を載たり。一つは一卷より二十四卷まで欠て、二十五卷より百卷まで存りて、終に用薬を記たり。かく其体定らざるは正からざる其一也。其文体大かた詔辞の体なれど、右に引たる如く、大同三年に此書を奉りし表も漢文にて、其比は何書にまれ皆然りき、其同時に成し古語拾遺も然也。万葉集は歌書なれば、漢文にては意通ひかたければ歌は仮名かきなれど、自別体にて、猶詞書は漢文なるものをや是其二也。彼巻いと短く二枚三枚つなれど当時の書さるさたにあらず。其は虫つきたるさたにしなしたれど、百卷然同様に虫まむやは。殊に仮名も違ひ、用ひ文字も謾りにて、当昔の云さたならず是其三也。後紀に阿部真直と云人見えたれど、真貞と云人見えず。はた真直、当時典薬頭にあらず。広貞は外従五位下にて、其比の姓は連にて、宿禰の姓を賜りしは弘仁三年六月の事にこそあれ。如此此名実

年数の誤あるは是其四也。古林見宜の医療歌配剂に、大同類聚方曰、痘瘡、初起自聖武天皇御宇、釣者遇蕃人繼此病、称裳瘡一児患之、則一村流行也、猶裳之曳下、故名、焉初生児、食金箔不患之、といへり(此文はつかなれと今世の文ならざ、後紀の表と併考るに、此文を正とすべし。はた痘瘡の説、古書に協へり)彼書此文に協はす是其五也。彼書用薬部の加母と云物の条に加賀国より出といへれど、史には越前国加賀郡と有て、別に一国に成しは弘仁十四年、割越前国置加賀国、とありて、大同三年より十五年後の事なるをや是其六也。其小便の色を云る条に茶の如しとあり。茶は嵯峨天皇の比より見えたれば、其比有べからず。在とも未近く譬に取るばかりにはあるべからず是其七也。当世の風病と云しは、既に云へるが如く、後世の風と云とは異なるを、今俗に風と云物の如記ししは、古をしらぬ者のしわざにて是其八也。(我師今の鈴屋大人云、此書の辞体を按ふに、北條氏執権の比の人の物せしにや、といはれき。是に依て又考るに、当世より其書ありて別に何とか名ありけむを、近世に痴人の大同類聚方などいふ、よき名附たるか。又其比の人即偽作りたるものにもやあらむ。)である。



静嘉堂文庫所蔵

すなわちこの中で大きな疑問点として掲げているのは、『日本後紀』の大同三年五月三日の条文に記されている安倍真直と『大同類聚方』の安倍真貞の名であり、衛門佐と典薬頭の官職名が異なっている点である。この件は、別稿にて論ずる。

花野井有年によると、方定は『大同類聚方』の延喜本・延長本を、嘉永五年(一八五二)頃に発見している⁽¹⁰⁾。

方定が刊行した『大同類聚方』は、表紙に「大同類聚方 寮本」という題簽、その右に彼の命名した「勅撰真本大同類聚方」の題と一冊の内容を示した目録題簽が貼られている。病名が記されている巻には、対応する漢名病名が併記されている。

『勅撰真本大同類聚方』は、延喜本を底本に、延長本・寛仁本を用いて欄外に校異を施している。

方定は、安政三年（一八五六）より『勅撰真本大同類聚方』の刊行を始め、亡くなる元治元年（一八六四）頃まで続けたにも拘らず、最後の一冊分二巻より七巻を発刊することが出来なかった。

しかし、延長本・寛仁本で校異を附している点で、他の『大同類聚方』より価値が高い。

彼の蔵板書目を見ると、「同継」（巻毎ニ注シテ副本トス）「同翼」（異本ノ逸文ヲ集註シテ活人手段トス）を『勅撰真本大同類聚方』に続いて刊行する予定であったが、¹¹残念ながらそれは為されなかった。

三、寮 本

方定が底本にした延喜本は、典葉寮印の判が捺されているので寮本とも呼ばれる。

この本は、『本草和名』を撰した深根（深江）輔仁が、延喜十二年（九二二）正月より十三年五月のはじめにかけて写したものである。

この時の署名が一之巻の終った後と本の末尾に、

延喜十二年正月写 深根輔仁

延喜十三年五月一校了 大医博士 深江朝臣輔仁

とある。

深根（深江）輔仁に関しては、資料が少ない為未だ解明されていない点が多い¹²。

しかし、右の文から、この間に深根から深江に氏が変わった事、大医博士になったことやかばねが朝臣に変わったことがわかる。これも深根（深江）輔仁の解明の一助になる。

四、寮本と他の流布本との違い

比較する流布本として、呉秀三ら編『日本医学叢書』の「大同類聚方」⁽¹³⁾を用いた。

この叢書には、「寮本」(私見では方定の刊行した『勅撰真本大同類聚方』である)の八巻より十七巻も収載されている。また、この叢書本を基に校注を附して大神神社から出版したもの⁽¹⁴⁾、全訳精解の平凡社本⁽¹⁵⁾もある。

1 寮本には、天皇に書物を奉たときの上表文、医官の心得を説いた医式、わが国の医薬の祖の教も具わっているし、分量も記されている。すなわち形の整ったものである。

2 流布本では編者名が安倍・出雲等とあるのみで、他に関与した人達のこととは判らない。しかし、寮本では上表文の末尾に、この本に関与した人達のこと、

大同三年五月三日

大初位上典薬少属臣忌部宿禰惠美麻呂

従八位下典薬大属臣大伴宿禰乎智人

外従五位下典薬允臣若江造家継

外従五位下兼行侍医典薬助但馬権掾臣出雲連広貞

従五位下典薬頭兼行左大史大舍人助相摸介臣安倍朝臣真貞

と記載されており、その他の人達もわかる。

3 寮本には、古字古韻が用いられ、圈などの則天文字や多くの異体字が使用されている点も、流布本とは異なる。

4 寮本の文章は、和文体で宣命書きに属するが、助詞や活用語尾は、流布本のように小書でなく、大書である。つまり、古体を留めている⁽¹⁶⁾。

5 卷数の記され方が、寮本は『古事記』⁽¹⁷⁾や『令集解』の「古記」⁽¹⁸⁾引用書と同じ幾巻で、流布本は『日本書紀』⁽¹⁹⁾や『令集解』⁽²⁰⁾と同じ巻幾で、ここにも違いがある。

五、寮本の目次

寮本の編集は、他の流布本とかなり病名の巻数に異動があるので、内容目次を紹介する。多くの異体字を含むので、新字体を採用した。

上大同類聚方表

一之巻 大穴牟智命之教・少彦名命之教・武内宿禰之教

二之巻

三之巻

四之巻

五之巻

六之巻

七之巻

未見⁽²¹⁾

八之巻 波耶智邪魔悲 一云須波不紀病・波奈太里也美・於楚解病

九之巻 乃无土加世病

十之巻 架奢菩良新

十一之巻 登喜耶微

十二之巻 比江夜万飛

- 十三之卷 那通氣耶民
- 十四之卷 波支古紀也美
- 十五之卷 惠耶美 一云神乃介
- 十六之卷 日布里夜万比・無南我梨夜尾
- 十七之卷 越智病
- 十八之卷 阿之茂迺安当利
- 十九之卷 佐伽菟伽俐病
- 二十之卷 烏太加多身病
- 二十一之卷 波羅介病
- 二十二之卷 区段利波羅病
- 二十三之卷 宇可美病
- 二十四之卷 古比介病
- 二十五之卷 記波堂病
- 二十六之卷 加世乃病
- 二十七之卷 安波者也味
- 二十八之卷 阿陪宜耶万比
- 二十九之卷 無那加敵利病
- 三十之卷 乃无度加反里病
- 三十一之卷 久羅美病

- 三十二之卷 加当都伎耶麻飛
- 三十三之卷 須非南里病
- 三十四之卷 波良古波里病
- 三十五之卷 波羅不区里病
- 三十六之卷 迦波介病
- 三十七之卷 阿囊簸邏楊莽必
- 三十八之卷 辰太須久免野瀾
- 三十九之卷 阿之南閉病
- 四十之卷 身甫之比羅介病
- 四十一之卷 烏豆南比病
- 四十二之卷 能津伽理耶麻飛
- 四十三之卷 阿多布礼病
- 四十四之卷 母能久流比病
- 四十五之卷 於保須耶嘛毗
- 四十六之卷 烏渡屠流美病
- 四十七之卷 伊番喇甫世病
- 四十八之卷 久楚布勢病
- 四十九之卷 胸夜美病
- 五十之卷 波羅伊太美病

- 五十一之卷 波羅裳路裳路
- 五十二之卷 眼疾 宇波日目・奈加日免病・楚故比目 一云烏羅加波之目病
- 五十三之卷 布度利目病・烏豆木免病
- 五十四之卷 登利免・布左目
- 五十五之卷 和多利目病・烏羅加差目病・眼裳路裳路
- 五十六之卷 迦新羅雲遲
- 五十七之卷 波乃智也美・阿波智病
- 五十八之卷 智瞢衢・遲区堂流
- 五十九之卷 之波伊婆利病
- 六十之卷 禰伊婆喇耶美
- 六十一之卷 袁美難乃邪魔悲 都幾佐波喇夜美
- 六十二之卷 之羅智奈我智耶麻日
- 六十三之卷 痛波理耶美
- 六十四之卷 阿礼介能和坐
- 六十五之卷 阿礼麻度比倭坐
- 六十六之卷 知阿礼病・智久良三和坐
- 六十七之卷 知不累比耶身
- 六十八之卷 知乃保世和坐・後波羅痛病・乳乃病・安止脹病
- 六十九之卷 毛路毛路乃血乃病

七十之卷 小兒之病 須久毛堂江病

七十一之卷 遲離解

七十二之卷 惠務師邪魔悲

七十三之卷 无寸古婆美病

七十四之卷 加多加異耶美

七十五之卷 波羅波利病・安可波他反病

七十六之卷 伊裳加左・乃解具佐

七十七之卷 加于陪加差

七十八之卷 可左病乃多具日 世南半寸加左

七十九之卷 返寿美可佐

八十之卷 波多介迦左

八十一之卷 敷氏冒佳総

八十二之卷 難憐瘡毀嫩

八十三之卷 牟娜軻瑳病 一云無那智須美

八十四之卷 能无土不世病

八十五之卷 乃牟度布吉可差・阿奈迦佐 比迦左 布久利迦佐

八十六之卷 美々之耶末比・美々瘡・微臺囉痲佳叉

八十七之卷 波南乃耶麻比・波娜儂鷄野微

八十八之卷 之多乃病 久智乃病 久智乃病・牟之婆民耶美

八十九之卷 波支可左病・都満波菓耶美

九十之卷 志喇可差

九十一之卷 端務尸可差糠 一名阿介久左・娜魔寿波太

一云志呂南万数
志良波多介

九十二之卷 可丹然瘡・摩躰咳瘡

九十三之卷 波之利瘡 一云保年志婆利

九十四之卷 可左乃耶麻比裳路々々・瘡散之薬之方・諸之班病

九十五之卷 微大甕可左耶民

九十六之卷 耶必伐乃滝邪 紀利紀受登母云・紀寿玖流悲耶瀧

九十七之卷 久自木和坐 保祢多我比登母云

九十八之卷 波布務新能倭邪

九十九之卷 鷄裳濃迺王邪

百之卷 雑々乃病

医式(方定刊行本の版心には「大同方医式」とある)

六、奉勅同撰の意味

寮本だけでなく、他の流布本も「奉勅同撰」と記されている。

『続日本紀』⁽²²⁾ 『日本後紀』⁽²³⁾ の六国史をはじめ『延喜式』⁽²⁴⁾ は、「奉勅撰」となっており、これが一般的な型である。なのに、ここで「奉勅同撰」が用いられているには、それなりの意味があると考えられる。

諸橋の『大漢和辞典』を見ても、「同撰」は載っていない。しかし「同学」が出ており、そこには「一緒に学ぶ」⁽²⁵⁾ とい

う意味が記されている。

同とは、説文に「合会するなり」とあり、口で謀り合議する意である。⁽²⁶⁾つまり「同撰」とは、「寄り集って合議しえらぶ」という意味になる。

一般的には、天皇の命を受けて各地に通達を発し、献上させた薬方を集め『大同類聚方』が編纂されたものと思われる。

しかし、通達が発せられた形跡は見当たらない。このことは寮本の百巻の珠潔河薬の割注で、それを証明することが出来る。

そこには「後日注進仍戴之」(後日、注進して、仍て之を戴く)とある。

もし通達が発せられて薬方が集められたものであれば、それはすべての薬方についていえる事で、この箇所のように割注を必要としないはずである。

編纂は、したがって典薬寮の五名の氏族に伝わっている薬方やこれまでに五名が集めた薬方、典薬寮や内裏に残っている資料を持ち寄って選別した。と考えれば「同撰」の記載も納得できる。

類似した薬方の選択は、古体を留めている方を採用した。それが、由緒正しさを表わす証の一つであったと思われる。

七、おわりに

佐藤方定が刊行した『勅撰真本大同類聚方』は、深根(深江)輔仁が写した延喜本(寮本)を底本としている。

寮本は、上表文・医式も具わり、撰進本を写したと考えてもおかしくない。

『勅撰真本大同類聚方』は、静嘉堂文庫・成篁堂文庫・研医会図書館・豊橋市中央図書館・富士川文庫(京都大学)・杏雨書屋に所蔵されている。

この方定本が真本であれば、わが国の古代医学や古代史に寄与すること大である。今後も筆者は、残りの問題を順次検討する。

謝辞

則天文字を示唆して下さった畠山敏行様、方定本の刊記の件でお手数をおかけした研医会図書館の斎藤仁男様、岩波書店辞典部の水野清三郎様、お茶の水図書館の落合俊彦様、名古屋大学附属図書館の金子豊様に感謝の意を表す。

また、静嘉堂文庫・無窮会・杏雨書屋・岩瀬文庫・富士川文庫（京都大学）・東京大学総合図書館・国文学研究資料館・都立中央図書館・豊橋市中央図書館・刈谷市中央図書館・大分県立大分図書館・平塚市中央図書館の職員の方々に深謝する。

注と文献

- (1) 上表文中に「医方所鍾豈遺命於断他邦剂」(医方の鍾る所、豈遺命にて他邦剂を断つならむや。)とあることから桓武天皇である。このことは別稿にて論ずる。
- (2) 国史大系編修会『新訂増補国史大系 日本後紀』六九頁、吉川弘文館、東京、平成元年(一九八九)。
- (3) 佐藤方定「奇魂」、富士川游ら編修『杏林叢書下巻』三〇七—三〇九頁、思文閣、京都、昭和四十六年(一九七二)複製。
- (4) 富士川游『日本医学史』五一—五二頁、日新書院、東京、昭和十六年(一九四一)。
- (5) 服部敏良『平安時代医学の研究』一三五—一三六頁、科学書院、東京、昭和五十五年(一九八〇)。
- (6) 和田英松『本朝書籍目録考証』四八六頁、明治書院、東京、昭和四十五年(一九七〇)影印。
- (7) 物集高見・物集高量『広文庫第十一冊』八四〇—八四一頁、名著普及会、東京、昭和五十一年(一九七六)覆刻。
- (8) 大川茂雄・南茂樹『国学者伝記集成』八八九頁、名著刊行会、東京、一九六七年。
- (9) 文献(3)二六三頁。
- (10) 花野井有年『医方正伝』(嘉永五年序刊)、富士川游ら編修『杏林叢書下巻』三三六頁、思文閣、京都、昭和四十六年(一九七二)複製。
- (11) 佐藤神符満(方定)『奇魂附録備急蓬萊八葉新論』安政五年刊。

- (12) 文献(4) 八五頁。
- (13) 土肥慶藏・呉秀三・富士川游選集校定『日本医学叢書』五十四—二百三十九頁、金港堂書籍、東京、明治三十八年(一九〇五)。
- (14) 大神神社史料編修委員会『校注大同類聚方』大神神社、奈良、昭和五十四年(一九七九)。
- (15) 楨佐知子『全訳精解大同類聚方』平凡社、東京、一九八五年。
- (16) 沖森卓也『木簡に現れた古代日本語』中に、「自立語を大字で、助詞助動詞、活用語尾や接辞など付属語的な要素を小字で書き記した文章を宣命体というが、古くは付属語的な要素も同じ大字で記されていたことが藤原宮出土木簡によって明らかとなった(阪倉篤義、一九六九)」、沖森卓也・佐藤信『上代木簡資料集成』一八七頁、おうふう、東京、一九九四年。
- (17) 『日本思想大系古事記』十頁、岩波書店、東京、一九八二年。
- (18) 東野治之『日本古代木簡の研究』二〇一頁、塙書房、東京、昭和五十八年(一九八三)。
- (19) 『日本古典文学大系日本書紀上』七六頁、岩波書店、東京、昭和四十二年(一九六七)。
- (20) 『新訂増補国史大系令集解第一』一頁、吉川弘文館、東京、昭和五十七年(一九八二)。
- (21) 未見ではあるが、文献(11)の「依毘須可羅美味餘言」中に、「勅撰真本大同類聚方六卷木部二依毘須可羅美味辛久香四採実乎乾之葉毛共仁用字」とあることから、六之巻は木部で、用葉が載っていたことがわかる。
- (22) 『新訂増補国史大系続日本紀前篇』一頁、吉川弘文館、東京、昭和三十八年(一九六三)。
- (23) 文献(2) 三頁。
- (24) 『新訂増補国史大系第二十六巻』「延喜式序」三頁、吉川弘文館、東京、昭和四十年(一九六五)。
- (25) 諸橋轍次『大漢和辞典巻二』八一—三頁、大修館書店、東京、昭和四十一年(一九六六)。
- (26) 白川静『字訓』一八五頁、平凡社、東京、一九八七年。

(平塚市・静観堂薬局)

Studies on the “Daidouruijhou” the Oldest Medical Book in Japan

by Shirou GOTOU

The Daidouruijhou (大同類聚方) was compiled in A.D. 808 and was submitted to the Emperor. However, this work came to be regarded as apocryphal after the publication in A.D. 1799 of the Nihonkouki (日本後紀) which contained records of A.D. 808. This was because scholars had doubts about the differences between the Nihonkouki and the Daidouruijhou. Norisada Sato (佐藤方定) was a leader of the scholars. However, when he discovered a new copy of the Daidouruijhou he recognized that it was a genuine book and named it the Chokusenshimpon Daidouruijhou (勅撰真本大同類聚方). Nobody can call the Daidouruijhou as an apocryphal work without investigating this book.

(8)